

か、げ、及、び、裸、體、畫

黒田清輝氏談

われ／＼畫家は、今日尙ほ修業時代に屬してをる。吾々に理想通りの完全な作品を望むのは無理な注文だ。われ／＼は唯だ、他日の完成を期するがために、幾分か古きより新しきに移るつなぎとして、専心に努力を費してをるまで、吾々の時代に其の完成の期が来るか何うかは分らないのだ。戦勝後の日本が今日萬般の事業に精力を注いで、國力發展の基礎を造りつゝあると同じやうに、われ／＼畫家は、正に全力を盡して其の完成の期に向つて進みつゝある。西洋では既に修業時代を經過して、個人々々に一かどの技倆をもつた人が昔から多く出て居るし、現今でもまた其人に乏しくないが、日本では未だそれまでに達してをらぬ。然し、日本の畫家は未だ修業時代を經過してゐないだけ、その修業時代より成完時代に達するまでの、種々の研究に伴ふ興味の際に於ては、西洋の畫家よりも多く得られるわけだ。日本に今、一人でも理想通りの完全な技倆を有つた人が出て來たとし給へ、その人が動かす力といふものは非常なものだらう。だから吾々は、今日に於ては如何なる方面、如何なる種類の畫を書いても、それが必ず研究にもなり又た奨励にもなるので、お互ひに成る可く理屈にかなつた、自然に近いものを撰んで、出来るだけ多くの研究を積まねばならぬと。さうしたら後には完全に美化せられた理想畫ともなり、又或は今日まで西洋にも日本にも見ることの出来なかつた、特種の新しいものが生れて、畫界に一の新機軸を出すことが出来ないとも限らぬ。兎に角日本の畫家は、今日尙ほ修業時代に在ることを忘れないで、お互ひに自然を

本として出来るだけの研究を積むべしである。

西洋畫にかげといふものがある。一體このかげといふものは、あまり有り難いものではない。それも巧みに書いたのなら可い可らんが、かげをかげとして、即ちかげといふ觀念を以て書いたのは、決して人に快感を與へるものではない。光線についての智識がない人など、自分の寫眞の、顔が半分黒く寫つてのを見て、寫眞屋に不平をこぼすことがあるが、これは無理もない話して、一體日本の人は其の習慣上、かげといふものを多く目に見ないのである。日本の昔からの人畜草木などの畫を見ても、このかげといふものは全然使つてゐない。して見ると、かげといふものは餘り必要が無いやうにも思はれる。けれども物の凹凸を寫すには、何うしても天然の光線に従はねば、之を明瞭にすることが六ヶしいのだ。で僕は此のかげといふものを、一種の色と見て、人の美感を惹くやうな、佳い色で出したならば、或はかげといふ、厭味を無くすることが出来はしないかと思ふ。がこれは實際に於て中々容易には出来ない話だ。然し將來は或は或は出来るかも知れぬ。西洋では無論出来まいけれども、我が日本では、かげのない明るい、強い色を以て凡ての事を書き得る方法が、出来るだらうと思はれる。私は常に暗い處を描く時は、かげといふ觀念を全然去つて、その暗い處もやはり一種の色と見て描く。何故かといへば、即ちかげをかげとして描く時は、何うしても畫がきたなくなる。彼處に懸けてあるのはミレーのかいた畫であるが、御覽の通り非常に闇色が多い。あんなに畫の全體が殆むど闇色で掩はれてゐるやうなものを見ては日本の人は恐らく愉快な感は起さないであらう。尤も十八世紀の頃には、色の製造法については闇色に長じた人は多く居つたけれど、明色に長じた人は少なかつたので、其頃の畫が一昧に闇色に富んで居るわけであらうが、併し西洋でも此頃では闇

色に富んだ畫が漸次に少なくなつて來たやうである。西洋の昔からの畫が闇色に富んでゐるからといつて、日本の人が日本の自然を寫すに西洋のそれを學ぶ必要はないので、第一、日本人の性質からいつても、西洋の人ことに獨逸の人などの陰鬱性なのとは全然ちがつて、一たいに賑かな浮ツ調子な性質を有つて居るから、勢ひ闇い色を好まない。で日本では將來に於て此のかけといふものを全然省いて、明るい強い色を以て凡ての事を描き得るやうな時代が來はしないかと然う私は思つて居る。

日本では裸體畫についての研究が足りない、これは飽くまでも研究すべき必要がある。しかし此の裸體畫といふものが、日本に於て將來發達するか何うかは甚だ疑問だ。私一人の考へでは、恐らく發達することはないと思ふ。けれども其の研究は御互ひに何處までも積まねばならぬ。といふのは醫者が只だ手のさきで腹や脉を押へたぐらゐるでは、人間の全軀の生理を知ることが出來ないやうに、裸體畫の研究も、實際の裸體について研究を経なければ、眞に裸體の美を知ることが出來ないのと同じわけで、世間の人が、裸體畫といへば直ぐに風教問題などをつぎ出して、一も二もなく之を排斥する傾きがあるのは、吾々の常に慨嘆に堪へないところである。目的の善悪は問はないで、裸體畫を頭から排斥するやうな人はその將來を知らないのみか、其の過去をも又た知らない人だ。醫者が生理の研究の爲めに人體の解剖を見て、誰もそれは不道德だとして攻撃する者は有るまい、若しそれを攻撃した日には、生理の研究は出來なくなる。一人の犠牲を拂ふが爲めに、他の多くの人の生命が助かる如く裸體畫も其實際の研究を始めて始めて人に感化を與ふことが出来る。日本の裸體畫が一體に拙いのは言ふまでもなく其の研究が足りないからで、われ／＼は何處までも此の裸體畫の研究を盛んにせねばならぬ、政府は勿論世間一般の

人も、裸體畫について誤解を抱かず、なるべく其研究を奨励して貰ひ度い。何を云うても我が國の繪畫は今日尙ほ研究時代に屬してをるので、それを奨励するの義務ある政府に向つては、われ／＼は特に注意を促がし度いと思ふ。然しながら、前にも述べたやうに、日本の裸體畫が將來完全に發達するか否かは疑問で、今日の日本人の風俗や習慣や又た日本人の骨格など凡ての點より考へて、裸體の美、即ち裸體畫そのものは何うしても發達が六ヶしいやうに思はれる、單に技術といふ點は發達するか知らんが、裸體の美を精神的に味い得ることは恐らく望まれまい。然し少しでも發達し得るだけは飽くまでもこれが研究奨励に勉むべしだ。

【『新声』二六一 明治四〇年二月】